

# 春燈

2016  
February

2月号



主宰の句

安立公彦

貼り替へし障子明りに母のこゑ

皇帝ダリア冬立つ空を独り占む

夕鐘の音色を濡らす時雨かな

綿虫の遅れ付き来る葛西橋

櫻桃子忌の寒灯一つ道を成す



# 久保田万太郎の句

## 叱られて目をつぶる猫春隣

『流萬抄』昭和三十三年

「こでまり抄」に猫を抱かれた万太郎師の写真が掲載されている。飼猫のトラは、大柄で立派な面立ちである。逃げだす程でもない叱られ方をして、そこから姿を消したつもりで目をつぶる猫。ほほえましい交流が、ゆったりとした春目前の季語と、びたりと合って動かない。流萬抄には十三句の猫の句がある。ご多忙の師は、気儘で自由に振舞う猫の姿に癒されて居られたのだろう。

尾野奈津子

# 久保田万太郎の句

あきくさをごつたにつかね供へけり

『草の丈』昭和二十七年

「昭和十八年十月、友田恭助七回忌」の前書がある。友田恭介は昭和十二年に、文学座の主要メンバーの一人であった。しかし友田は第一回公演の準備中に、上海で戦死した「ごつたに」東ねたという表現に追慕の情が深められている。この「ごつたに」の俗語に、万太郎師の飾らぬ真情をあらわし、亡き友田への語りかけの姿勢が「つかね供へ」で感じとられた。

永島雅子

# 燈下集



○ 金山雅江

みおくりてよりの月日や冬に入る  
干大根三浦の風に少し痩せ  
捨て惜しむ母の形身に着ぶくれて  
仕舞湯の石けん替ふる小晦日  
捨てかぬる夫の湯呑みや大晦日

○ 太田佳代子

診察券吸ひ込まれゆく今朝の冬  
病棟の奥へ冬日をいくつも越え  
未来凶の日ごとに変はる冬の薔薇  
病院にカフェオープンの小春かな  
重なつて窓這ふ雨の粒や冬

○ 久保久子

身ひとつの重み軽みや木守柿  
偲ぶこと多き齡や枇杷の花  
枯芙蓉風に鳴りたる暮色かな  
さくら炭小さく切つて人こほし

埋火や竹啼く夜さの汁粉碗

○ 佐々木良玄

冬が来たもう死に頃と言ひに来た  
木枯や雲に隠れし空の青  
干大根母も故郷にひからびて  
冬の虹消えて一本道残る

霜の夜に歩む音すなりイエスの歩み

○ 廖 運 藩

着ぶくれて白髪が似合ふ翁振り  
着ぶくれて上上吉の御籤引く  
着ぶくれて唐手指南の優男  
着ぶくれて叱られてゐる盗み食ひ  
着ぶくれて肩で分け入る縄暖簾

○ 生 方 義 紹

深酒や木犀の香に酔はざりき  
口重き古老のごとく銀杏散る  
冬めくや予防注射の針光る  
冬浅し蛍光管の余命尽く  
名画座の椅子固かりき冬の雨

○ 久 米 憲 子

古民家の煙一筋冬に入る  
小春日や昔の匂ふ船溜  
折紙の兎はねゐる小春かな  
散る枯葉気長気短ありにけり  
神鈴の湿りがちなる神の留守

○ 小 倉 陶 女

立冬の息を大きく吸ひにけり  
座りても立ちてもひとり神の留守  
日向ぼこ身ぬちの母性目覚めけり  
引き際てふ美学ありけり憂国忌  
狐火や内緒話のまた内緒

○ 荒 井 慈

反橋の真ん中に立つ小春かな  
初時雨狛犬の胸濡らさざる  
神渡し何か忘れて来たやうな  
枇杷の花己が美学に徹しけり  
若冲の雄鶏の鳴く神楽かな

○ 佐 渡 谷 秀 一

九十度に開く聖書や今朝の冬  
落葉掃く明日の落葉は考へず  
大き輪の風に乗る鳶神送り  
短日やプラネタリウム星増やす  
わが息と風の声聞く冬銀河

○ 横田初美

賑やかに枯を楽しむ群雀

潮騒の確かなりズム帰り花

綿虫やふらりと友の訪ね来て

縁起物息かけ磨く小春かな

三味の糸切れて久しや冬の梅

○ 沼田桂子

埴輪の目さらに切れ長冬に入る

喧噪の世を断ち凜と白障子

一途とはこはれやすきや冬の虹

枯るる中宗達風神雷神図

里神楽余韻をのこし暮れにけり

○ 宮田豊子

ともに老い集ふ友垣冬うらら

そぞろ寒形見の袖に香を焚く

傍らに誰も居ぬ日や枇杷の花

風冴ゆる気になる句集繰りてみる

物なべて眠り安かれ冬の月

○ 佐々木新

巫女の声なぜか華やぐ神無月

黄葉散る戌辰の役の古戦場

またぎ宿横座に敷かる熊の皮

熊除けの鈴に行きあふけもの道

ランプ宿大きな鍋に狸汁

○ 呂秀文

糸編む遠き日の夢たぐり寄せ

虎落笛思考回路をとざされる

アカペラの混声賛美クリスマス

自己顕示強き女や寒の紅

寒紅や夢見る齡ではあらずとも

○ 呉文宗

柿食へばしばし子規の句に囚はるる

京菓子の色味淑やか柿もどき

笑み割るる柿の華やぎまま噛めり

小声交はず椅子の温もり美術展

着ぶくれて何の負ひ目かのめり足

春燈賞

川崎 真樹子

第44回春燈賞に決定します。

平成二十八年一月

春燈俳句会

安立公彦

# 当月集

安立 公彦選



○ 赤岡 茂子

紅葉粲々天海遺構の寺詣

紅葉明りの根本中堂菩提講

橋桁の水かげろふや秋日和

パール・バックの『大地』又手に長き夜

電子辞書言葉探しの夜長かな

○ 齋藤 晴夫

天涯に真闇の透くや神無月

悲しみの露どつさりと池に千草

紺佐助一輪挿して気を充たす

帰り花いつか色づく昼の月

錯落と時の流れに数へ日や

○ 川崎 真樹子

静かなる手話の賑はひ冬木立

落葉踏む詩人の遺書を読むやうに

ミステリーの謎解き佳境冬の雷

水面に顔出すやうに着るセーター

シユレッターに刻む秘密や十二月

○ 後藤 眞由美

はつ冬の白きカフエの白き卓

今生の亀の幸せひなたぼこ

大原や降りみ降らずみ石露明り

杉の秀の冬三日月を冠とす

オリオンの舞ひ立つ闇のレクイエム（パリ・テロ

○ 木村 梨花

抜け道の坂また坂や石露の花

茶が咲いて結納の日取決まりけり

息白し言ひたきことを飲込めり

木枯のわがまま通す四辻かな

来年も生きるつもりのコート買ふ

# 春燈の句

安立 公彦選



石路さくや嘗あて藩主の下屋敷〔新徳聖句〕 山下 健治

木洩日に水脈重ねゆく鴨の群

忘年や古りし茶房の灯ともせる

天狼の青き光の師走かな

足元に落葉舞ひくる川原径 神奈川 石原 節子

肩に触れ山茶花散るや裏通り

夕日入るさざなみのなか都鳥

寝ねられず葛湯吹きをり風の音

二の丸の空堀に散る紅葉かな 茨城 山崎 刀水

小春日や仄かに匂ふ御礼肥

芥に出す嫁入り布団の重みかな

短日や江戸より千里取手宿

青郵忌脂ほどよき金目鯛 千葉 鶴岡 紀代

寺町に枇杷の花咲く築地堀

下駄の音残して除夜の宮籠り

水鳥の嘴紅く湖暮るる

日の海へ真つ直ぐな道石路の花

たまきはるいのち水面に水鳥来

鷹描くや鷹のこころになりゆく眼

夕映の冬田啄む鳥の影

霊山のしづけさ鴉の高鳴けり

根本堂古木に熟るる榎櫃の実

草の絮平らな径をつまづけり

牝鹿呼ぶ声聞く夜の巖島〔宮島退〕

ゆつくりと老いの自転車一葉忌

生き残り鍋に集ふやクリスマス

英語本めくり館パン漱石忌

里神楽英語教師の古バイク

東京 小林 文良

鳥根 土江 比露

東京 土屋 光男

# 余言

安立公彦

しぐるるや頰れやすき舌下錠

片桐てい女

この句の初見は十一月の本部句会だった。中七が「崩はれはやき」となっていて、鑑賞に些かの異和感を感じた。それが二月号の出句では、「頰れやすき」とあり、その折感じた異和感が消えてゆくのを覚えた。

現在大方の錠剤は、水や白湯で嚙まずに服用する。「舌下錠」は文字通り舌の下で唾液にとかして吸収する錠剤。病気の如何によつては本剤を必要とすることもあろう。普通には注目されない薬品の服用に、句ごころを見出す作意はみごとだ。作中の一字にも推敲を疎かにしないと、本格俳人の姿勢を見る思いがした。

鬼柚子のぶかと寄り来るゆたかさよ 上山 永見

柚子湯の柚子は普通掌中に収まるものが多い。この句の「鬼柚子」は実の径が一五センチを越す。「利雄さんへ」の

前書きの示す通り、松橋利雄さんの庭に育った鬼柚子。私も戴いた。浴槽に入れると一塊の鬼柚子が悠然と柚子湯の一角を占め、体を動かすと、「ぶかと寄り来る」さまはさながらこの句の示す通りの「ゆたかさ」である。

作者はこのところ健康を損ねておられると聞く。「鬼柚子」の効用が実を結ぶことを念じるばかりだ。

風音の凍つる気配や龍雨の忌

柴崎 富子

増田龍雨は明治七年京都に生まれ、その後上京、吉原中米樓の書記となる傍ら、近代俳句の一方の雄として珠玉の句を残す。昭和九年十二月三日死去、六十歳。これらのことは、本誌十二月号で完結を見た、「旧派の群像―増田龍雨をめぐる俳人模様」に詳しい。執筆者の金丸文夫氏の連載は三年に亘り、龍雨の俳人生を余すところなく載録されている。この連載については、改めて稿を為すつもりだ。

この句には、増田龍雨という歴史上の俳人への畏敬の念が厚くこめられていて、それは句を見る人の姿勢をも正す表現となっている。△行年や夕日の中の神田川 龍雨。

枯蟪蛄祈りの姿崩さざる

橘 正義

歳時記には、「枯蟪蛄」という言葉に疑問を呈している

のももあるが、季節の景物として存在感を持つ季語である。その枯蠟螂が枯葉の先に止まったままの姿勢は、まさに「祈りの姿」である。但しそれを「祈りの姿」と見るか、「静止の姿」と見るかは、人それぞれであろう。

この句には、作者の移りゆく季物への敬虔な思いがこめられていて、句を見る人の気持を自ずと「祈り」へ誘う。

人形の髪梳く子らや年用意

三上 程子

今年も歳晩の候となった。新年を迎えるための用事は多い。〈年用意霽あたたかき日なりけり 万太郎〉。しかしそういう慌しさの中にあつても、万太郎師は、詩情あふれる句を成す。只ただ感嘆あるのみ。

掲出句、一読景が浮かぶ。多忙な大人たちの中で、幼い女兒が人形の髪を梳いている。一人ではない。その無心な姿には、人形の髪を梳くことが、その幼児たちの年用意であるという思いさえ感じさせる。この作者の区域は広い。広さの中に詩情が宿っている。

うつし世に千五百の幸や冬木の芽 鷹崎由未子

こういう句を見ると、無性に冬木の芽が見たくなり、咫尺に満たない庭に下り立つ。紅梅の芽がみじりの細枝に並び、それはまさに、「千五百の幸」を感じるものだった。

冬身には来る春への希望が宿る。その希望はしばし冬の寒さを忘れさせてくれる。四季を持つ風土の幸である。

この句、「千五百の幸」がみごとだ。更にその中七を呼び込む、「うつし世に」が穏やかな語感で動かない。

落葉踏む音に癒され試歩の道

府川 昭子

作者は長く入院されていたのか。いまようやく体調も戻り、「試歩の道」を心ゆくまで味わっているのだ。入院生活の経験は大方の人にあること。私も現役の頃、風邪から敗血症を併発し、暮れから三月まで入院したことがある。

「落葉踏む音に癒され」は、心の奥から湧き上るしみじみとした悦びの言葉だ。その悦びを表現する手段を、私たちは「俳句」という詩形に委ねることが出来る。考えてみると、何という有難い表現の場を共有していることだろうか。己が身を大切にそして俳句を大事にと言いたい。

近松忌妻に美形の女客

懸林喜代次

近松忌は旧十一月二十二日。万太郎、敦両師には芭蕉忌、蕪村忌の句はあるが、近松忌の句はない。(全集所見)。

この句、中七を例えば、「美貌の」とすると女客の容姿は浮かぶ。しかしこの句は「近松忌」。美形の言葉がこの句を一幕の舞台へと誘うのだ。「美形」あつての、「近松忌」と言えよう。内容の深い佳句だ。